日本スラヴ学研究会　オンライン・シンポジウム

スラヴ世界のSF
-K.チャペック『ロボット』初演100周年によせて-

開催日時：２０２１年１１月２８日（日）
１４：００～１６：４５
形式：オンライン（要事前参加登録）
司会：小椋彩（東洋大学）

プログラム

14：00～14：10
開会挨拶　長與進（本会会長・早稲田大学名誉教授）

14:10～14:40
ブルナ・ルカーシュ（実践女子大学）
「人類の自縄自縛をテーマに―
K・チャペックの『ロボット』と『山椒魚戦争』をめぐって」

14:40～15:10
菅原祥（京都産業大学）
「社会主義時代のポーランドのSF映画：
ピョートル・シュルキンの〈ディストピア四部作〉を中心に」

15:10～15:20 質疑応答
15:20～15:30　休憩

15:30～16：00
越野剛（慶應義塾大学）
「社会主義リアリズムとソ連のSF―カザンツェフを中心に」

16：00～16:30
ミレン・マルチェフ（東京大学）
「20世紀後半のブルガリアSF
―「コスモス」が花を咲かせる、ディロフが果実を得る―」

16:30～16:40 質疑応答

16:40～16:45
閉会挨拶　三谷恵子（本会企画編集委員長・東京大学）

発表概要

ブルナ・ルカーシュ（実践女子大学）
「人類の自縄自縛をテーマに―
K・チャペックの『ロボット』と『山椒魚戦争』をめぐって」
本発表では、K・チャペックの初期の戯曲『ロボット』と晩年の小説『山椒魚戦争』の主題、日本における受容・評価や翻訳のあり方などを検討したうえで、今日これらの作品が読者に何を訴えるか、両作品のアクチュアリティーについて考察を行います。

菅原祥（京都産業大学）
「社会主義時代のポーランドのSF映画：
ピョートル・シュルキンの〈ディストピア四部作〉を中心に」
ポーランド映画の歴史において、「SF映画」は決して盛んに制作されてきたジャンルであるとは言えないだろう。だが、1970年代から80年代のポーランドにおいてはいくつかの特筆すべきSF映画が相次いで作られ、中にはユリウシュ・マフルスキ監督『セックスミッション』（1983年）のように今日に至るまでカルト的な人気を博している作品も存在する。本報告ではこれらポーランドの社会主義体制後期から末期にかけてのSF映画の中から、特に一連の注目すべきディストピア映画を制作したピョートル・シュルキン監督の作品に焦点を当て、当時のポーランド社会においてこれらの映画が有していた批評性を明らかにする。

越野剛（慶應義塾大学）
「社会主義リアリズムとソ連のSF―カザンツェフを中心に」
SF的な想像力は社会主義リアリズムによって強い制限を受け、雪解け期のエフレーモフの登場まで見るべきソ連のSF作品はなかったといわれる。しかしアレクサンドル・カザンツェフ（1906-2002年）は今日のSF評論や文学史家の評判は悪いが、資本主義陣営との闘いや大規模な自然改造といった政治的に正しいテーマを極限まで展開して大衆的な人気を博した。彼の作品を手掛かりにして、社会主義リアリズムとSFの関係について再考したい。

ミレン・マルチェフ（東京大学）
「20世紀後半のブルガリアSF
―「コスモス」が花を咲かせる、ディロフが果実を得る―」
ブルガリアのSF文学は、1930年に原点を持つとされ、20世紀の後半に国内で数多くの作品を生み出したジャンルである。本発表では、その中で中心的な役割を担ったコスモス誌及びSF作家のリューベン・ディロフについて紹介する。

事前参加登録方法
右のQRコードまたはこのURLから事前参加登録をお願い致します。

日本スラヴ学研究会秋シンポジウム 2021/11/28 14:00

お問い合わせ
日本スラヴ学研究会事務局slav@jsssll.org（慶應義塾大学・越野剛）
日本スラヴ学研究会HP: https://www.jsssll.org/